

ざるを得ない。思えば、シベリアの奥地で重労働にあえぎながら、いつかは生還できると厳しさを耐え忍んだ身震いするような収容所の光景は、今も走馬燈のように脳裏を駆けめぐる。天皇陛下の玉音放送で全国民に呼びかけられた「耐えがたきを耐え忍びがたきを忍び」とのお言葉とは想像に絶する違いがあり、ソ連軍の満州における開拓団虐殺事件、従軍看護婦の蹂躪事件、ソ連軍の暴虐の爪あと、シベリア抑留者の生死の重労働は一体何であったのか。

第二次大戦中シベリア抑留という事実は小さな歴史かも知れないが、ただ遠い苦しい思い出として語るだけではすまされない。この事を忘却させてはならない。強制労働により五体は蝕まれ、その傷痕は体の奥深く刻み込まれ、今なお病状が進行して暮らしている生き証人がいる事も忘れてほしくない。

今までの出来事で日本の侵略の事は、国会議員の先生方も新聞等や外国訪問の際首脳会談で発言され、遺憾の意を表しておられるが、抑留についての惨虐の実態は一行たりとも記述がない。シベリアでの実態を、

後世の国民にその真実を正しく伝えることこそ平和への願いであると信じて、毎年事ある度に大勢の人前でシベリア抑留者の生き証人として訴え、事実を語ってきた。特に老人の皆様方は涙して聞かれた。抑留者はあと幾許もないが、「人道的に全く許せない、言語道断であり、再びあってはならない」と、私は死ぬまで語ります、叫び続けます。食糧ももらえず重労働で亡くなった人。栄養失調で南京虫に攻められ、骨と皮ばかりで死んだ友。やせ細って斃れた同僚。今語るにも表現出来ない、語るに言葉がない、だが語り続けたい。多くの人のために、後世の日本国民のために、生ある限り語りたい。それが生き証人としての使命だからである。

抑留記

熊本県 山形 満治

昭和十八年一月十八日、満州牡丹江穆稜^{ムヘン}県下城子、

牡丹江重砲兵満州第四三八七部隊に現役兵として入隊。

全員集合の中で、我が部隊は関東軍の虎の子である、砲兵は火砲と運命を共にすべしと部隊長の訓示があった。四五式二十四センチ榴弾砲は口径二十四センチ、弾一発の重さが二百キロ、大口径の火砲で、運搬、備砲、観測、通信、射撃という高度の技術と強健な体力を必要とする。冬は極寒の地、夏は灼熱の太陽の下で、組立、備砲、射撃演習が繰り返された。火砲を移動するには八トン牽引車十台ぐらいを必要とした。隣に牽引車中隊があったが、どこかへ移動していた。昭和二十年になって我が部隊は北朝鮮の咸興に移動するようになっていた。

二十年八月九日早朝、敵機が低空で我が部隊を機銃掃射。自分は取るものも取らずに砲廠へと急いだ。火砲の移動もそう簡単にはいかない。一門の火砲には十台ぐらいの牽引車を必要とした。牽引車は一台もない。砲身だけでも八トン牽引車が必要である。仕方ない人力で、三十数人で引っ張ったがなかなか動かない。敵機は低空でやって来る。宮門を出て間もなく道の横に

砲身を置いて別れねばならなかった。火砲と運命を共にした日夜の訓練も水の泡、胸の張り裂けん思いである。部隊には八門の火砲があった。二百キロの弾丸を撃ちまくったらソ連の大小戦車もそう攻め込むことはできなかったと思う。残念無念である。

陣地に向かう途中本部の将校の指揮下に入り、司令部に伝命に行くように言われた。中隊とは別れることになる。十人の小隊である伝命の中には誰も知った人はいない。司令部へと急ぐ。牡丹江に通ずる道路は混雑していた。横道へ入った。小さな道、草むらの中を進む。牡丹江へ通ずる道路はソ連の戦車、火砲、自動車、ジープと砂塵を立てて走っていく。夜は明々とうら伊トを照らして長い列を作って牡丹江へ走っていく。自分たちは、隊伍を組んで行動するのは敵の目標になるといつて三人一組で行動することになった。本通りには出られない、小道、草むらと行進は続く。中隊と別れて三、四日になるので食料も少なくなる、食べられる物は何でも食べた。ヘビ、カエル、何でも空腹を満たす。友軍軍馬の倒れているのも見かける。昼は草

むらか木のかげで、夜に行動する事が多い。子供を連れられた婦女子の方に、主人は兵隊に取られたと言って助けを求められる。日本に元気で帰ってくださいと励まして別れた。伝命という任務がある、何ともしてやれない。

部隊を離れて十数日、天皇陛下の終戦の玉音放送があったと知らされる。一、二回聞いても信用できない。ソ連の兵隊が日本人を連れて何回となく自動車に乗って叫んで回る。武装解除。二年八カ月必勝を信じお国のためと命を捧げ、懸命に頑張り抜いたのもこれで終わりかと思う。悲しい敗戦の惨めさが改めて感じられた。道の横に倒れていた戦友、草むらの婦女子と子供の無事を今も思う。

作業大隊が作られ出発。お前たちはソ連に抵抗したので歩いて東京へ帰るのだ、東京ダモイ、ヴィストラと言って、小銃を持った若いソ連兵が尻をたたき。腕時計とか珍しい物は取られる。早く東京へ帰るのだと言って尻をたたき。食物のまずいことと言ったらこの上ない。コウリヤンを五分ぐらいに精白した物で、粥

よりも水が多くて箸にはかからない。人間の食うような物ではない。武装解除したら哀れなものである。自由もなく希望もなく、夢もなく食物も十分でない。雨の日も風の日も夜は着のまま野宿し、歩き続ける。体力も気力も衰えるのを感じる。監視兵は東京ダモイ、ヴィストラ、ヴィストラ。年をとった人や体力が弱った人は夕食を口にいっぱい入れて、朝になると動けない。動けない人は置いて行かねばならない。シベリアの冬は早く、寒さを感じる。

穆稜小山陣地の横を通る時も、ここが自分たちの陣地で、部隊が、部隊長が多くの将兵と玉砕された所であったので、深く御冥福をお祈りした。しばらく歩いて下城子に着く、自分の部隊のあった所である。営門の横に砲身が赤くさびている、何とも言えない気持ちである。武装解除されてから、いろんな物は取られ、服は汚れ破れ、寒さは身にしみる。

ウオロシロフという町の山のふもとに、有刺鉄線が張り巡らされて角々には望楼があり、ソ連兵が銃を持って見張っている場所があった。東京ダモイは真っ赤な

うそであった。ここは自分たちの収容所であった。幅が五メートルぐらい、長さが二〇メートルぐらい、柱が点々と立っている。ここが自分たちの住む所であるという、驚くばかり。

板切れを集める、釘を作る、ワイヤー鉄線を短く切って釘にする。板を張り終わると土を練って壁を塗る。

屋根には満州から持って来た天幕を張る。家の内は、中心が通路で両側が二段ベッドである。ベッドは板切れで作られる。布団はない。夏の草を刈って家畜の飼料用に乾かした物が布団の代わりである。着の身着のまま乾草の中にもぐりこんで寝る。ペーチカは石炭運搬用のトロッコを引つ繰り返して、石炭が落ちないようにタナが作ってある。石炭は十分あるので寒い時はいくらでも焚く。便所は横五メートル、縦一〇メートル、深さ一・五メートルぐらい。幅三〇センチ、厚さ五センチぐらいの板が置いてあり、共同便所である。雨が降ったり、風が吹いたりする時は困ったものであった。シベリアは水が少ない。顔を洗ったことはない。

衣・食・住と言うが、何ひとつ満たされていない。

た。捕虜、敗戦の惨め、食物と言っても人間の食べる物ではない。コウリヤン粥とスープにはキャベツの葉が浮かんでいる。肉、魚はほとんどない。たまに鮭、ニシンがスープの中に入っている。黒パンはめったにない。あってもマッチ箱ぐらいの大きさ。炊事場に行くと牛の頭、足の骨、爪が山積みされている。野菜も肉も魚もまともな物は食ったことがない。満州の軍人、一般人、数十万人が急にソ連国に入ってきたので物の不足するのわかるが、人道を外れていると思う。寒さと食糧不足、重労働で、元気で普通の人はほとんどいない。春になると草の新芽、アカザ、ヨモギ、木の新芽と食べられる物は何でも取った。物をそのまま炊いても苦くて食べられない。木炭を入れるとおいしく食べられる。捕虜の通った道には草も生えない。人間の生活とは思えない。

収容所でも作業が始まる。自分たちの仕事は石炭掘りである。小さな灯油ランプを持って坑内に入る。三代で作業をする。坑内には歩いて入る。作業場に着く、ソ連の人がつるはしで掘ったものを下に降ろして

石炭運搬車に積み込み、炭車を出口まで持って行く。石炭を掘った跡には坑木を建てる。寒い時、暑いときは過ごしやすい。炭坑の中ではソ連の地方人と一緒に仕事をしていた。警戒兵は地上にいた。初めの間は地方人も日本人を珍しがっていた。作業が終わると初めのうちはシャワーを浴びさせてもらえた。数日たった頃、夜勤務の人が三人で逃亡したので大変だった。監視は厳しくなり、食料は削られる、シャワーは使えない。水も使う事ができなくなる。顔も真っ黒、作業服も真っ黒、歯と目が白いくらい。仕事は重くなり、栄養失調者はふえた。

満州で働いていた人達もいて、歩いてソ連に来たので道が分かるのだろうが逃亡が無事に成功したか確かなことは分からない。隣の戦友は夕食まで食べたが元気がない。朝になると動けない。亡くなった人の着物を見ると虱が着物の縫い目に行列している。

終戦後入浴はしていない。炭坑でも入浴はない。防寒服だから虱がつきやすい。二年間働いて、汽車にシャワーが付いていて一回、二回目は池のよう

な所で天幕を張ってシャワーを浴びた。虱退治がある。幅五メートル、横七メートルぐらいの部屋に防寒服を吊り下げ、温度を上げる。虱を焼き殺す。下には虱が一面積もって落ちている。

たまに穀物貯蔵倉の作業に行くことがある、監視の目を盗んで穀物を持って帰る。ズボンの下をくびって穀物を入れて持って帰り、皆で空腹を満たす。作業の行き帰りには下を向いて歩く。煙草の吸殻が何本か集まると、それを紙で巻き直して吸う。

炭坑は小さな炭坑で、歩いて入る。監視兵は炭坑内には入らない。仕事はあまりきびしくない。逃亡者が出るのが一番悪い。手足に触ってみて悲しくなる。骨と皮ばかり。

二十二年五月、ソ連の女軍医さんの身体検査があった。尻の皮をつまんで見て体力を検査する。幸い班内で休養する事になる。骨と皮ばかり。衣服も汚れ体も汚れ悲しくなる。食事も十分でない。作業の行き帰りも監視がついている。帰って収容所でも望楼の上から銃を持って見張っている。郷里に帰る希望もなく夢も

なく、明日の命も生か分らない。自由もない。医者に休むように言われ班内で休んでいた。何か楽しい事も遊ぶ友達もない。しばらくして池上町の西村友喜さんという人に巡り会った。自分の家の近くである。友喜さんは年令も先輩であった。色々と話ができ、早く帰った人から無事を知らせることにした。班内にいると監視兵が来て兵舎の掃除に来るように言われた。夕方になると収容所に帰る。朝またソ連兵の兵舎に行く。

ソ連の軍隊には警戒兵と食料・衣服などを預かる兵隊がいる。自分は食料とか衣服を預かる兵隊の方であった。朝から一人で営門を出て掃除、片づけ、炊事の手伝いをした。食事もソ連兵と同じものを食べさせてもらった。炭坑の汚れも落ち、大分元気を取り戻した。しばらくして夜もソ連兵の所に泊まるようになる。夜は銃の手入れもするようになる。

町に食糧を取りに行ったり衣料を取りに行く。しばらくすると元気になった。町に出ると若い女が足並を揃え元気よく歩いているのが目につく。ソ連兵はイワ

ミ、イワミと言って可愛がってくれた、今日でも思い出される。ソ連兵は上官とか兵隊とかいうことはないようだ。上官といっても当番が付いているようではない。自分のことは何でも自分で行っているようだ。勉強したい人は夜学に行っているようだった。水の少ない所で、ソ連の兵隊が朝から顔を洗うのにコップ一杯できれいに洗っていた。ソ連兵にも普通の人にも可愛がってもらえた。

二十二年九月二十四日、ロシア兵から東京ダモイと言われた時は、本当だろうかと思った。当番をしているうちに元気になり、ウオロシロフから汽車に乗ってナホトカへ着き、高砂丸で帰る。舞鶴の山々の緑を見て郷里に帰ったと嬉しさがわいてきた。復員業務を終えて父母の待つ郷里に着いた。

戦後五十数年の月日は流れた。牡丹江稜の陣地で玉碎された部隊長以下多数の将兵、シベリアで殉難死亡された貴い御英霊、並びに満州で殉難された家族や内地に帰還後に死没された御英霊に対して心から御冥福を祈り、深甚なる感謝の誠を捧げます。

必勝を誓い国のために死をも省みず、自由も希望も夢もなく、明日の生も死もわからぬ異国の果てで幾度か忍苦の捕虜にも、かくて内地に帰還する日が遂に来た。

敗戦戦後処理、シベリア抑留の問題の解決を政府が温かい気持ちで一日も早く終えることを望んでいる。